



# 子育てチャンネル

## 記憶の中に生き続けている祖母

あかい にんじん  
おいしい にんじん  
じいちゃん ばあちゃん  
つくった にんじん

けさも かあさん みぞしるに  
ねぎと きぎんで いれました

この詩は、6歳年上の私の姉  
が小学校1年生の時に書いた詩  
です。畑も野山もつつすらと雪

をかぶる季節になると、私には  
んじんとねぎの味噌汁（みそし  
る）を作ります。あたたかい味

噌汁は、寒い朝には一層おいし  
くうれしいものです。味噌汁の

中の赤いニンジンと緑のねぎは  
目にも鮮やかで、大地の恵みの  
豊かさで祖父母の愛情がしみじ  
みと思い出されるのです。

姉は東京で生まれました。第  
二次世界大戦下の昭和19年、二  
歳の時に妊婦強制疎開で身重の  
母と二人、津軽海峡を渡り、父  
の故郷、旭川にやってきました。

東京の軍需工場に徴用されて

いた父は、昭和20年3月の東京  
大空襲を生き延びて帰郷したの  
ですが、そんな難民のようだった

た家族の命を支えてくれたのが  
祖父母の作るお米や野菜だった  
のです。

祖母はリヤカーに野菜を  
積み、市場に卸し  
ていました。

そしてその  
帰りに売  
れ残った

野菜をわ  
が家に届け  
てくれたので

す。石狩川のほ  
と、永山の秋月橋や金  
星橋を渡り、大町のわが家に。

昔の人は本当によく歩きました。  
祖父は土を宝物のように扱い、  
畑に入るときはいつも素足でし

た。祖母は農作業のかたわら花  
を愛し、家の前から大きな道に

出る小道は、夏にはマツバボタ

ン、秋にはコスモスに縁どられ  
ていました。

私たちは、祖母を慕って大町  
から永山までよく歩いて行きま  
した。祖母は、冬になると頬っ  
ぺたを真っ赤にして雪道をやっ

てくる私たち孫を、角巻き  
に身を包んでいっ  
も途中の道ま

で迎えに出  
てきてく  
れる優し  
い人とし

た。私、家  
の裏を流れる石  
狩川の瀬音に耳を澄ま

せながら、布団の中でこの祖母  
から昔語りを聞いていた幾夜も  
の思い出を忘れることが出来ま

せん。  
祖母は晩年、わが家で暮らし  
ました。父が引き取って世話を

したのです。祖母のおしめをバ  
ケツに入れ、自転車に乗って石  
狩川に洗いに行っていた父でし  
た。

父と母は、戦争でささやかな  
暮らしも仕事も奪われ、子ども  
を育てて生活を再建していくだ

けで精いっぱいでした。そんな  
時代、祖父母はしっかりと大地  
に根ざして農民として生きてい  
ました。愛情いっぱいのお米や

野菜は、私たち家族の命と心を  
育み、支えてくれたのです。

体の弱かった母はよく言っ  
ていました。「ばあちゃんは観音  
様のような人だったよ」と。祖

母のやさしい声音とともに、思  
い出が今もよみがえってきます。

あかい にんじん  
おいしい にんじん  
じいちゃん ばあちゃん  
つくった にんじん

こども富貴堂店長

福田 洋子